

# 『潮騒』のジレンマ

——「ダフニスとクロエー」との比較から——

高沼利樹 TAKANUMA Masaki

## 「小説家の休暇」の暴露性

三島由紀夫の『潮騒』は、1954年6月に新潮社から書き下ろして刊行された。よく知られる通り『潮騒』は発表当時から毀誉褒貶さまざまに評価された作品である<sup>1</sup>が、本作の自然描写に関する評価に関しては否定的なものが目立った。たとえば寺田透は「海の匂いはどこにもしない、海のどよめきもどこにも聞こえない」と評価し<sup>2</sup>、小林秀雄は三島が作品の「急所を空想した」と述べたうえで「視覚的な鮮やかなイメージに満ちてゐるが、島の生活の味わひはない。潮はリズムカルであるが、潮の香はない。詩的であるが、詩ではない」と述べた<sup>3</sup>。対照的なのは服部達で、『潮騒』の自然描写に一般的な遠近感が欠けて見えるのは、「ギリシア時代の遠近法」である「触覚的遠近法」が採用されているからであり、自然描写は「人物像の脆弱さ」と対応する「みごと」なものだと評価した<sup>4</sup>。

本作に関する論考は今日まで非常に多く発表されてきたが、自然描写に関する考察は他のテーマに関するものと比べて注力されてこなかったように見受けられる。その大きな理由として考えられるのは、三島自身がのちに日記体の評論・エッセイ集である「小説家の休暇」のなかで、『潮騒』の自然描写の目論見とその成否について言及しているということだ。キーワードとなるのは「孤独」と「協同体意識」だが、順を追った説明が必要だろう。三島は『潮騒』についてヘルダーリンに言及しながら次のように論じ始める。

私は自作「潮騒」のなかで、自然描写をふんだんに使ひ、「わがアルカディヤ」を描かうとしたが、出来上がったものは、トリアノン宮趣味の人工的自然にすぎなかつた。

その意味で極端なもの、もつとも観念的な心象の自然描写は、ヘルデルリンの「ヒュペリオン」に見られる。冒頭からして、

「愛する祖国の地は、ふたたび私に哀歡をもたらす。

頃日、私は朝な朝な、コリント地峡の山上に立つ。花間の蜜蜂のやうに、わが魂はしばしば、大洋のあなたこなたを飛びめぐる。その海は右に左に、灼熱の山々の足もとを冷やしてゐる」

(中略)さて私は、絶対に心象にかかはりのない自然、いはば物的な自然、といふごときものを仮定して、これと対蹠的なものにヘルデルリンの例を挙げたのである<sup>5</sup>。

ここから三島はギルバート・マレーなどを引用して文明論を展開していくが、文中からヘルダーリンの作品における自然についての説明を抽出するならば、ヘルダーリンは「自然科学的人間解釈の上に立つた十八世紀の啓蒙主義」を前提に「古代希臘の唯心論的自然観のうちにふたたび身をひた」そうとしたが、「もとよりギリシアはすでに死んでおり」、作品には「ヒュペリオンの孤独」が表出しているとまとめられるだろう<sup>6</sup>。『潮騒』の自然描写に関する自作言及はこれを踏まえたうえでなされている。長くなるが引用したい。

さて私が「潮騒」でゑがかうと思つた自然は、「ダフニスとクロエ」に倣つた以上、かうしたギリシア的自然、ヒュペリオンの孤独を招来せぬところの確乎たる協同体意識に裏付けられた唯心論的自然であつた。私は自然の頻繁な擬人化をも辞さなかつた。それにもかかはらず、「潮騒」には根本的な矛盾がある。あの自然は、協同体内部の人の見た自然ではない。私の孤独な観照の生んだ自然にすぎぬ。一方、登場人物はと見ると、彼らは現代に生きながら政治的関心も社会意識も持たず、いはゆる「封建的な」諸秩序の残存にも、たえて批判の目を向けない。しかし私は現実に、そのモデルの島で、かうしたものすべてに無関心な、しかも潑漑たる若い美しい男女を見たのである。たしかにかういふ彼らの盲目を美しくしてゐるものは、自然の見方、自然への対し方における、古い伝習的な協同体意識だと思はれ

た。もし私とその意識をわがものとし、その目で自然を見ることができたとしたら、物語は内的に何の矛盾も孕まずに語られたにちがひない。が、私にはできなかつた。そこで私の目が見たあのやうな孤独な自然の背景のなかで、少しも孤独を知らぬやうに見える登場人物たちは、痴愚としか見えない結果に終わったのである<sup>7</sup>。

この一連の記述において、三島は『潮騒』で「ギリシア的自然」を描こうと試みたがそれに失敗し、「トリアノン宮趣味の人工的自然」しか描けなかつたと述べている。この意見は自然描写の人工性とギリシャ趣味について言及しているという意味で、先に紹介した寺田、小林、服部の意見それぞれと呼応するものとも言えよう。本作の自然描写に関する考察が案外に滞ってしまっているように見える理由の一つは、三島のこうした暴露的な言及が、少なくともいくつかの側面から見れば鋭く射ているからであろう。

しかしだとしても、「小説家の休暇」で自然描写を「倣つた」ことが明かされているにもかかわらず『潮騒』と「ダフニスとクロエ」のテキストとを本格的に比較した論考が非常に少ない現状は、『潮騒』研究において憂慮すべき事態であるように思われる<sup>8</sup>。三島にとって「ダフニスとクロエ」の自然描写においては具体的に何が成功しており、『潮騒』のそれにおいては具体的に何が失敗していたのか。ヘルダーリンの例示からは、『潮騒』の失敗の根本原因が古代ギリシャと現代日本との文化史的な較差に根差していることが示唆されているが、その較差は作中にどのように表れたのか。『潮騒』において描かれるべきであったものと実際に描かれたもの、あるいは描かれなかったもの、それらの内実は「ダフニスとクロエ」のテキストとの比較を行って初めて解読できるものであるように思われる<sup>9</sup>。

---

### 「協同体意識」と自然観

まず確認したいのは、『潮騒』における「協同体意識」の描かれ方である。先に挙げた「小説家の休暇」の記述を念頭において『潮騒』

を読むと、その対応関係は明白であることがわかる。「青年会の例会」に関する一連の記述を見てみたい。

その晩、新治は青年会の例会へ行つた。(中略)そこではまじめに教育や衛生や、沈船引揚や海難救助や、また古来若者たちの行事とされてゐる獅子舞や盆踊りについて論議が闘はされ、そこにあると、若者は公共生活につながつてゐると感じ、一人前の男が肩に担ふべきものの快い重みを味はふことができた<sup>10</sup>。

この例会に参加する様子について「新治は微笑して、壁際に坐つて膝を抱いた。そうして黙つて、人の意見をきいてゐるのが常である」とも説明される<sup>11</sup>。つまり本作の主人公新治は例会に参加し文字通り「そこにある」だけで、協同体の構成員であることの実感を得ることができているのである。

加えて、例会の最中で参加者たちが詩句について感想を言い合う場面も、「小説家の休暇」に言うところの「協同体意識」の描出に役立っていることを確認したい。

それから謄写版刷りの機関紙『孤島』の合評会になり、読書好きの若者が随想のおしまひに引用したヴェルレーヌの詩句と称するものが一同の論難の的になつた。

『知らずわが悲しき心は  
何ゆゑに海のさなかを  
きようきよう<sup>12</sup>と物狂ほしき  
翼もて踊り翔るぞ……』  
「きようきようたら何や」  
「きようきようはきようきようや」  
「きよろきよろのまちがひやろ」  
「そやそや、『きよろきよろと物狂ほしき』やつたら筋が通つとる」<sup>13</sup>

ヘルダーリンとヴェルレーヌの差異があるのは言うまでもないことだが、ここで取り上げられている詩は、「小説家の休暇」において紹介された詩と内容的によく似ている。「小説家の休暇」における

詩の挿入とそこから展開される一連の議論は、そもそも『潮騒』への自作言及のためになされていたことでもあり、『潮騒』の例会の場面を念頭においたものであった可能性が高い。「小説家の休暇」においては「わが魂」が「大洋」を「飛びめぐる」という詩句から「ヒュペーリオンの孤独」が見出され、それと無縁なものとして「古代希臘の唯心論的自然観」や「確乎たる協同体意識に裏付けられた唯心論的自然」を対置する記述が見られた。このような記述は、『潮騒』において「わが悲しき心」が「海のさなか」を「踊り翔る」という詩句が（「孤島」という単語とともに）提示されても、『潮騒』の例会に参加する若者たちは内容に共感できないという描かれ方に対応しているように思われる。また先に挙げた通り「そこにゐる」だけの新治は、この詩句に関する論難について何の意見も表明しない。新治を含めた『潮騒』の若者たちは、どれものちに名付けられるものではあるが、ほぼ全員が「ヒュペーリオンの孤独」を理解しないような「確乎たる協同体意識」を有する人物として描かれていたと判断できる。

こうした「協同体意識」は、たとえば歌島の漁区に関するさりげない記述にも反映されているように思われる。新治は歌島の主産業の一つである「蛸漁」に従事しており、午前中の収穫が「わづか五疋であつた」新治の舟が、「禁止漁区で、こつそり掛漁をやる」挿話が描かれる<sup>14</sup>。このときも新治は禁止漁区における漁について肯定、否定どちらの意見も抱かない。また新治の乗り込む漁船の船員たちは、島で捏造された噂が広まるときも公正な視点で事実を判断するいわば良識的な人物たち<sup>15</sup>だが、それとは裏腹に「こつそり」と禁止漁区で漁をすることは常習的な営みとなっているようだ。これに対して、本作のドルコオンであるところの安夫が島外の用事から帰る際の船上で景色を見たときの感情は、やや異なった様相を示す。「大洋のなかに岩の群立つ沖ノ瀬がみえる。それを見ると、安夫は眉をしかめて、歌島の唯一のこの屈辱の思ひ出から目をそむけた。古来争奪のたびごとに若者の血を流した沖ノ瀬の漁業権は、今では答志島に帰してゐたのである<sup>16</sup>」。ヒロインを強姦しようとする役割を担ういわゆる悪役との対比によって新治は、島の生活と密着した漁業の制度的・政治的側面について、批判意識を抱かない人物として強調して描かれているのだ。加えて、新治が「古代の神々のや

うに、雲がいくつも海の上に泛んでゐる」景色のなかで「彼をとりまくこの豊饒な自然と、彼自身との無上の調和を感じ」ている<sup>17</sup>ことも見過ごせない。登場人物たちの大部分は海や漁を通じて、またときに「神々」とのイメージまで喚起される形で、「確乎たる協同体意識に裏付けられた唯心論的自然」を享受しているのである。

実際のところ、使用されなかった「あとがき」では「この小説は反ロミオとジュリエットの的なものであり、既成道徳の帰依者たち乃至は適応者たちの幸福な物語であり、どの一頁にもデカダンスの影もとどめぬ小説」であるという記述が見られる<sup>18</sup>。『潮騒』の若者たちは「既成道徳」等の協同体における構成要件との軋轢を持たない「帰依者」ないし「適応者」として「幸福」を味わっている。これは逆に言えば、協同体の構成要件を批判しうる「政治的関心」や「社会意識」を持たず、また「いはゆる「封建的な」諸秩序の残存」にも批判の目を向けないことによってこそ、協同体の内部で「幸福」にひたっていられるということでもある。「小説家の休暇」によれば『潮騒』の失敗は、このように批判意識を持たないことによって「幸福」たる『潮騒』の登場人物たちが、そのことによって同時に盲目的な「痴愚」に見えてしまうというジレンマによるものであった。では、このジレンマは「ダフニスとクロエー」において具体的にどのように回避されており、それに「倣った」はずの『潮騒』においてはなぜ回避されなかったのだろうか。

---

## 神への非難

結論から述べれば、『潮騒』についてこれまでも別の論調で何度か指摘されてきた、登場人物と神との関係性<sup>19</sup>がこのことに大きく関わっていると思われる。三島はのちに「『潮騒』執筆のころ」という文章のなかで、「『潮騒』にあらはれる日本の神々には、ギリシアの神々のイメージが、二重写しになつてゐると云つてよい」と述べている<sup>20</sup>が、協同体における登場人物たちの批判意識という点に注意を向けたとき、「ダフニスとクロエー」における神の描かれ方が『潮騒』のそれとは明確に異なる。次の引用はダフニスとクロエーの二人が作中で遭遇する数々の艱難の一つ、クロエーが拉致されて

しまったときの記述である。

また今度は海岸へひよつとクロエーの姿でも見えはせぬかと馳けついたり、さてはあのかどわかされたときクロエーが逃げはいつた、ニンフたちの洞穴に行きなどしてみるものであつた。そしてからだを地べたに投げふせながら、ニンフたちは自分らを買つたといつて、脚言を並べたてる。

「あなた方の御手許からクロエーは奪ひ取られていつたんです、それをあなた方は平気で見ていらしたのですか。花冠をいつもあなたに編んでさしあげた、またしよつちゆう乳の御初穂もみなさん方に注いであげたり、ここに懸けてあるこの笙笛もお献げしたその娘がですよ。(後略)」<sup>21</sup>

このダフニスの非難に対して、ニンフたちは即座に応答する。

けして私らを責めてはならない、ダフニスよ。クロエーのことはお前よりずつと私の方が心にかけているのだから。(中略) 今が今あの子のことは私らがもうちやんと手配してある、メテウムナにつれていかれて奴隷にされたり、戦争の分捕品の中へ入れられなどしないようにだ。それにあの松の木の下に鎮座しといでのパアン様にも、お前方は一度も花さへお供へしたこともないけど、私たちから御願ひしクロエーの加勢をして下さることに定めてあるのだ<sup>22</sup>。

ダフニスはここで、別の協団体であるメテウムナの住人たちが自分たちの協団体を攻撃し富や人間を略奪していったという事実を、信心深い住人であったはずのクロエー(と自分)がニンフという神的存在の加護から逸脱してしまったこととして読み替えたうえで、ニンフを非難する。また非難されたニンフは逆にダフニスのパアンに対する不信心を非難しながら、メテウムナの略奪が神の配剤によって解決されるであろうことを説明し、ダフニスを安心させる。

神的存在に対する住人の非難は別の箇所にもある。クロエーの養父であるラモオンは主人の荘園を管理しているが、クロエーを思慕する牛飼いのランピスは嫉妬からダフニスとクロエーの結婚を妨害

するためにその荘園の花壇を荒らしてしまう。この荘園の中央付近には「デュオニソス神を祭る社殿と祭壇」があり<sup>23</sup>、その惨状を発見したラモオンの嘆きはこれに関連して、次のように表れる。

「やれやれ、この薔薇の花壇も何ていふぎまだろう、すっかり折れへしやげてしまつて。(中略) まあ、そこなデュオニソスさまとしたことが、あんた様も可哀想なこの花どもをお憐れみも下さらなかつたか、お近所でいつも御覧じなされとるのに、又その花でいく度となく冠をお着せしてお慰めたこともありましたに。どんなにしてまあ、この庭をこれからご主人の御眼にかけられよう。このごまを見なされたら、どんな気になられよう。」<sup>24</sup>

ラモオンは花壇が荒れている現状を把握しそれによって起こりうる不利益について想像するが、この惨状を引き起こした実際の原因を推理するよりも先に、かつ自らの管理責任は棚上げしたうえで、デュオニソスの責任を問うている。ダフニスとラモオンに共通しているのは、村や荘園が外的要因によって危難を抱えたとき、その直接的原因である対外的な折衝や利益関係や実務的な責任体系に問題意識を向けるのではなくて、村や荘園を見守る神的存在を非難するということだ。先の引用箇所でもダフニスがニンフに諭されたように、また別の箇所でニンフがダフニスに向かって「クロエーの縁組は別な神様のお仕事だ」と述べる<sup>25</sup>ように、「ダフニスとクロエー」のなかでは複数の神的存在が協同体の異なる部分をそれぞれ受け持ち「手配」している。協同体の構成員が協同体のある部分において何らかの問題に遭遇したとき、その責任の追及先として神的存在が選ばれるのは、この意味で珍しいことではない。

古代ギリシャを描いた「ダフニスとクロエー」の登場人物たちを三島が「痴愚」ではないと考えている理由はこのことと関連しているだろう。協同体の内部で登場人物たちは「政治的関心」や「社会意識」に通じうる批判意識を抱く。しかしそれを仮に現実の協同体に直接向けてしまえば、登場人物たちは「幸福」な「帰依者たち乃至は適応者たち」ではありえない。神的存在が協同体にとって身近な存在として批判意識の矛先となることで、登場人物たちは「幸福」



でありつつ三島の言う「痴愚」を免れるのである。

---

## 模倣の不徹底

「ダフニスとクロエー」と異なり、『潮騒』において神は人格化されず非難もされない。神的存在と人間が対話する場面は皆無と言ってよく、神との意思の疎通という観点から挙げてみても、初江と新治の恋愛が妨害されている期間に初江の「吉夢」において、「神のお告げで、新治はデキ王子の身代りであることがわかり」という形で表れる<sup>26</sup>のみである。また新治や新治の母親は、神社で島の発展や家族の安全を祈願し、その祈りの成就に対するお礼参りをする<sup>27</sup>が、不当な艱難に対する非難がなされたり恨み言が述べられたりすることはない。

『潮騒』におけるこうした傾向は次の場面に顕著である。初江の父である照吉によって新治と初江は逢瀬を禁じられるが、手紙のやり取りは密かに続けられる。引用は初江から新治に送られた手紙の内容を説明した記述である。

安夫が深夜泉のほとりで安江を襲った次第、その脅迫の文句、約束を守つて初江が黙つてゐたにもかかはらず安夫が腹癒せにあらぬ噂を村ぢゆうにふりまいたこと、昭吉が新治と会ふのを禁じたとき、初江がまつすぐに弁明し、ついでに安夫の暴行をも打明けたのに、父は安夫に対して何の処置もとらうとしないこと、そこで安夫の一家はあひかはらず親しく出入りしてゐるが、初江は安夫の顔を見るのもけがらはしく思つてゐること、などが縷々と述べられ、そして最後に安夫には決して隙を見せないから安心してもらひたい、と付け加へてあつた<sup>28</sup>。

本作において二人が被る艱難のうち大部分をまとめた記述であるが、この手紙を読んで「忿懣」を抱える新治の反応は興味深いものである。

「俺が貧乏だからいかんのや」

と新治が言った。彼はこんな愚痴に類する言葉をつひぞ口に出したことがなかつた。自分が貧しいといふそのことよりも、こんな愚痴を口にした自分の弱さを恥ぢて涙が出かかつた。しかし若者は顔を強く引締めて、この思ひがけない涙に抗ひ、ぶざまな泣顔を見せずにすんだ<sup>29</sup>。

初江との恋愛を阻害する艱難に対するここでの新治の反応は、とりわけダフニスやラモオンと比べたとき、誠実すぎるほど誠実だ。神的存在を非難するでもなく、悪賢く立ち回る安夫やそれに迎合しているように見える照吉ほか村の住人を非難するでもなく、自らの生まれと経済状況について「愚痴」を述べるにとどめ、しかもその愚痴も自身の内面的「弱さ」のうちに回収される。漁船の主である十吉も新治に向かって「今にきつとよくなる。正しいものが、黙つてゐても必定勝つや」と意見する<sup>30</sup>。彼らは艱難を甘んじて受け入れ、艱難の原因を批判しないのである。

作品の結末で初江との恋愛が成就した新治は「神々の加護は一度でもかれらの身を離れたためしはなかつた」と、また「この小さな島が、かれらの幸福を守り、かれらの恋を成就させてくれた」と考える<sup>31</sup>。「ダフニスとクロエー」においても『潮騒』においても、結果を見れば主人公たちの恋路は「神々の加護」を享受していたと言えるだろう。しかし「ダフニスとクロエー」と『潮騒』の間には、主人公たちが「神々の加護」への疑念をあからさまに表明するかどうかという差異があった。この意味で、三島が「ダフニスとクロエー」に倣って「確乎たる協同体意識に裏付けられた唯心論的自然」を描こうとした試みは不十分なものであったと言わなければならない。三島は「小説家の休暇」のなかで「自然の頻繁な擬人化をも辞さなかつた」と述べていたが、「ダフニスとクロエー」の模倣を徹底するならば、それ以前に神の「頻繁な擬人化をも辞さ」ないで、ある意味で気軽に非難できるような対象として神を描くべきだったのではないだろうか。この点を模倣しきれなかったことこそが、『潮騒』がジレンマを孕むことになった原因であるように思われてならない。

最後に付け加えておきたいのは、新治たちが「痴愚」に見えたことがある種の失敗であっても、これが三島の単純な力量不足によるものだったかどうかは判断が難しいということだ。柴田勝二は、本

作の舞台のモデルとなった三重県の神島の信仰について調査したうえで「信仰の拠点である八代神社が伊勢神宮と深い縁を持つ神社である」ことを重要視し<sup>32</sup>、作中の神社が同名であることや住人の信仰の描かれ方に触れ「この作品が浮上させる天照大神は天皇家の氏神であり、日本の歴史的な連続性を視野に入れる形で作品の構想がおこなわれていたことは疑いない」と述べる<sup>33</sup>。この意見は非常に刺激的であり注意深く扱うべきものだが、仮に『潮騒』に描かれた神的存在が何らかの形で天皇に通じるものであった場合、後年の三島の天皇観との関係性を無視することはできなくなる。「文化共同体としての天皇制」の可能性を探り<sup>34</sup>、天皇を「パーソナルなもの」にするべきではなかったと強調するようになる<sup>35</sup>三島にとって、この時点で神的存在を擬人化して非難することがどの程度可能であったのか、改めて考える必要があるように思われる。しかしむろんこうした問題は非常に規模の大きなものであり、ここで結論を出せるものではない。ほかの多くの課題とともに、今後慎重に検討を続けていきたい。

〔注〕

- 1 2021年9月現在では、『三島由紀夫事典』（明治書院、1976）や『三島由紀夫事典』（勉誠出版、2000）によって研究状況を大まかに把握できる。
- 2 寺田透「美しい海の映像」『日本読書新聞』、1954年7月12日。
- 3 小林秀雄「選後評」『藝術新潮』第6巻第1号、新潮社、1955年、261頁。また小林秀雄は同じ文章で、井伏鱒二のものとして「書き出しに、歌島は周囲一里に充たない小島だとあるが、終りに来ると周囲七里くらいの感じがする」という意見を紹介している。
- 4 服部達『われらにとって美は存在するか』審美社、1968年、13-18頁。当該の論考の初出は『群像』第10巻第6号、講談社、1955年。
- 5 三島由紀夫『決定版三島由紀夫全集』第28巻、新潮社、2000-2006年、636-638頁。
- 6 三島由紀夫、前掲書第28巻、639-641頁。
- 7 三島由紀夫、前掲書第28巻、641頁。
- 8 「『潮騒』と「ダフニスとクロエー」の内容を比較したものとしては、嶋岡晨「『潮騒』——三島文学の素顔」（『三島由紀夫研究』右文書院、2020年、255-267頁。初出は『三島由紀夫研究』右文書院、1970年）、下河部行輝「三島の『潮騒』の翻案振り」（『岡山大学文学部紀要』岡山大学文学部、1995年、15-38頁）、Saiichiro, Nakatani, “Metamorphosis of Daphnis and Chloe in the Far East: Yukio Mishima's *The Sound of Waves* (Shiosai),” (*Some Organic Readings in Narrative, Ancient and Modern*, Groningen: Barkhuis & Groningen University Library, 2019: pp.321-341) などが挙げられる。

- 9 本研究ノートでは、「ダフニスのクロエー」のテキストの底本として1948年に呉茂一の訳により養徳社から刊行された『ダフニスとクロエー——牧人の恋がたり』の第3版(1951年)を用いた。これは島崎博、三島瑠子共編の『定本三島由紀夫書誌』(薔薇十字社、1972年)において、同書の初版が三島の蔵書にあったと示されたことを根拠としている。しかし『定本三島由紀夫書誌』の蔵書目録では外国語原書が除外されており、三島が何らかの外国語によって「ダフニスとクロエー」を読んだ可能性は否定できない。今後の整理の進展が待たれる。
- 10 三島由紀夫、前掲書第4巻、240頁。
- 11 三島由紀夫、前掲書第4巻、240頁。
- 12 二度目の「きょう」は原文ではくの字点、以下同様。
- 13 三島由紀夫、前掲書第4巻、242頁。
- 14 三島由紀夫、前掲書第4巻、236頁。
- 15 三島由紀夫、前掲書第4巻、317-318頁。
- 16 三島由紀夫、前掲書第4巻、276頁。
- 17 三島由紀夫、前掲書第4巻、260頁。
- 18 三島由紀夫、前掲書第28巻、274頁。
- 19 たとえば杉本和弘『『潮騒』——「歌鳥」の物語』(『国際関係学部紀要』第6号、中部大学、1990年、355-364頁)は、本作結末の新治と初江の意見の相違について、「神々への信仰と写真の呪的な力への信頼に自足している初江と、神々の加護に感謝しながらも自らの力を自覚し、それを写真の力の上に置く新治との懸隔は意外に大きい」と意見を述べる。
- 20 三島由紀夫、前掲書第33巻、478頁。
- 21 ロングス(呉茂一訳)『ダフニスとクロエー——牧人の恋がたり』第三版、養徳社、[1948]1951年、50-51頁。
- 22 ロングス(呉茂一訳)、前掲書、52頁。
- 23 ロングス(呉茂一訳)、前掲書、100頁。
- 24 ロングス(呉茂一訳)、前掲書、104-5頁。
- 25 ロングス(呉茂一訳)、前掲書、90頁。
- 26 三島由紀夫、前掲書第4巻、326頁。
- 27 三島由紀夫、前掲書第4巻、243-244頁、363頁、ほか。
- 28 三島由紀夫、前掲書第4巻、317頁。
- 29 三島由紀夫、前掲書第4巻、317頁。
- 30 三島由紀夫、前掲書第4巻、318頁。
- 31 三島由紀夫、前掲書第4巻、377頁。
- 32 柴田勝二『三島由紀夫 魅せられる精神』おうふう、2001年、146頁。
- 33 柴田勝二、前掲書、149頁。
- 34 三島由紀夫、前掲書第35巻、40-51頁。
- 35 三島由紀夫、前掲書第40巻、555-556頁。

#### 【参考文献】

- 小林秀雄「選後評」『藝術新潮』第6巻第1号、新潮社、1955年、261頁。  
 柴田勝二『三島由紀夫 魅せられる精神』おうふう、2001年。  
 嶋岡展「『潮騒』——三島文学の素顔」『三島由紀夫研究』右文書院、[1970]2020年、255-267頁。  
 島崎博・三島瑠子編『定本三島由紀夫書誌』薔薇十字社、1972年。  
 下河部行輝「三島の『潮騒』の翻案振り」『岡山大学文学部紀要』岡山大学文学部、1995年、15-38頁。

杉本和弘「『潮騒』——「歌島」の物語」『国際関係学部紀要』第6号、中部大学、1990年、355-364頁。  
寺田透「美しい海の映像」『日本読書新聞』、1954年7月12日。  
長谷川泉・武田勝彦編『三島由紀夫事典』明治書院、1976年。  
服部達『われらにとって美は存在するか』審美社、1968年。  
松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫事典』勉誠出版、2000年。  
三島由紀夫『決定版三島由紀夫全集』新潮社、2000-2006年。  
ロンゴス（呉茂一訳）『ダフニスとクロエー——牧人の恋がたり』第3版、養徳社、[1948] 1951年。

Nakatani, Saiichiro, "Metamorphosis of Daphnis and Chloe in the Far East: Yukio Mishima's *The Sound of Waves* (Shiosai)," Ian Repath & Fritz-Gregor Herrmann eds., *Some Organic Readings in Narrative, Ancient and Modern*, Groningen: Barkhuis & Groningen University Library, 2019: pp.321-341.